

「他力の生活は最後まで努力せずにはおれない生活なのです」

宮城 顛(みやぎしずか)

この言葉は、元九州大谷短大で学長をされていた、宮城先生「真宗の本尊」という講義録の中にある言葉です。最初にこの言葉をきかれて、違和感を感じる方も多いのではないかと思います。私もその一人です。

一般に他力というと、人にまかせてしまおうとか、なり行きに身をまかせてなるようになるというよう意味の言葉として受け止めて、到底、努力するという言葉からは、ほど遠い印象をうけます。

しかしながら、仏教でいう「他力」ということ、とりわけ親鸞聖人が感じ取っておられた「他力」という言葉は、自己を深く見つめていくと、自分の力でいろいろなことをやってきたつもりであるが、何をするにしても、多くの関わりの中で存在している自分であることに深くうなずかにはおれないということのように思います。

そして、私が生きるということは、すべてのものは縁の中で生きているのだということを実感し、その中の一人として、まざまな縁によって与えられた今を精一杯生きれることであるということにより強く感じ取った言葉ではないでしょうか。